東洋學報　第壹卷第參號　明治四十四年十月發行

西域史上の新研究

白鳥庫吉

漢の司馬遷が史記を著はして、之に大宛列傳を掲げてより、歴代の正史大都その體裁に則りて、卷末に西域傳を附せざるなし。極東の學者が夙に西方絶遠の事蹟を窺ひ得たりしは實に此傳の存ずるに由れり。然れども此等の記事は主として漢土の使者が彼國に派遣せられたる時に、親しく見聞せる所と、彼地の使臣が中國に來朝せし時に、史官の尋問せる所とに係れるを以て、材料の零碎にして豐富ならず、排列の亂雜にして連絡を缺く等のことあるは、蓋し亦止むを得ざることなりとす。されば古來人口に噲炙せる邦國或は人物にして、而もその詳細正確なる事實に至りては、尙ほ之を究むること能はざる程なれば、その他の事蹟は推して知るべきのみ。是に於てか漢史の西域傳は宛も空中に映ぜる樓閣の如く、その縹緲變幻の狀態は、或は神秘を眼目とする宗教家などには滿足を與へたらんが、的確なる事實を要求する歴史家をしては、常に隔靴搔痒の感を懷はしめたりき。然るに此の二百年以來泰西の學者が東洋の研究に從事してより、その成績の顯著なること、實に驚嘆に堪へざるも

のあり。彼等は亞細亞各國の言語文字を學修して、その史籍記錄に通曉せるのみならず、之に加ふるに廢墟を發掘し遺跡を踏査して、新事實を發揮せしこと、其の幾何なるを知らず。斯の如くにして漢國に傳はれる西域の事蹟も、彼等が他の方面にて得たる豐富の知識と相待ちて、互に相啓發闡明せられたること甚だ大なり。而して今や西域史上の秘密は殆ど悉く彼等の手によりて、開發し去られんとす。吾人の如き極東の學者が、今日西域に關して脉絡貫通せる知識を有し、且つ之に對して科學的の考案を下し得るに至れるは、偏に西洋學者の熱烈にして眞摯なる研究の賜なりと謂ふべし。夫れ西人の研究此の如く旺盛にして、吾人の西人に負ふ所のもの亦已に此の如く大なりと雖も、而もその間に尙開拓を要すべき餘地の存ぜざるにあらず。余輩は嘗て烏孫國及び大秦國に關する論文を草じて、之を學界に提供したることありき。然るにその後益々研鑽を重ぬるに及んで、前說に變更を加ふべき處あるを發見し、又新に考案を得たる處もあれば、爰に西域史上の新研究と稱する題目を設けて、更に陳述する所あらんとす。蕞爾たる小論文なりと雖も、尙之によりて涓滴の裨益を學海に加ふることを得ば、望外の幸なり。

第一　康居考

方今泰西の東洋學者は多く古の Sogdiana の地を以て漢代に於ける康居國の本地に當つれど、是れ畢竟隋唐二書の如き後世の記錄に拘泥して、漢代に成れる史記漢書の文面をふかく考察せざるよりの謬見なり。史記（卷二百二十三）の大宛列傳を案ずるに、「康居在大宛西北可二千

里、行國、與月氏同俗、控弦者八九萬人、與大宛隣國、南羈事月氏、東羈事匈奴」と見えたり。大宛は今の Ferganа 州と殆どその疆域を同じうせしが故に、此國の都城より西北二千里の處に位せし康居國は、斷じて Sogdiana の地と見るべからず。又更に漢書卷九十六の西域傳康居國の條を見るに「康居國王冬治樂越匿地、到卑闐城、去長安萬二千三百里、不屬都護、至越匿地、馬行七日、至王夏所治蕃內九千一百四里、戶十二萬、口六十萬、勝兵十二萬人、東至都護治所五千五百五十里、與大月氏同俗、東羈事匈奴」と記せり。此文によれば、康居民族は夏冬の二期に於いて住居を變更する游牧民にして、その生活の狀態は全く今の Kirgiz の曠野に放牧する Kasack 人と同樣なり。此平原は冬期の寒氣峻烈にして、牧畜の生息に適せざるを以て Kirgiz Kasack 人は秋風の吹き始むる頃より、穹廬を解きて南方溫暖の地に遷徙し、冬期の短少にして糧食を得易き處を擇んで居住するを常とす。此の如きの地は多く河澤湖泊の沿岸にして蘆荻の繁茂する處なるが、Syr 河の沿畔 Saxaul 木の叢生する邊は、彼等が最も好んで聚合する處なりといふ。(Schwarz. Turkestan. pp. 82–83) 漢書の文面に據れば、康居の樂越匿と稱する地は此民族冬期の住所にして、Kirgis 人の所謂 Kišlak なり。又蕃內といふは夏期の放牧地にして、彼等の所謂 Yaylak なりとす。

康居が今の Kirgis Kasack に均しき游牧民にして、其住地もまた其曠野の間にありしと見るに於いて、正鵠を失はずとせば、これより其都城たる卑闐城の方位に就いて考究すべし。漢書の西域傳大宛國の條を案ずるに「大宛國治貴山城中略北至康居卑闐城千五百一十里、西南

至大月氏六百九十里、北與康居、南與大月氏接」とあり。此文によれば、康居の都卑闐城は大宛の都貴山城の北千五百十里の處に位すれども、史記の大宛傳には康居は大宛の西北二千里に在りとあれば、此兩國都城の距離は千五百里乃至二千里の間に出入し、その方向は貴山城より北方乃至西北方の間にありしと思はる。而して卑闐城の方位を定むるに方りて、之が手懸りとなるべき唯一の紀事は、大宛の貴山城よりの方向と距離とのみなれば、貴山城の位置を確定するときは、やがてまた卑闐城の所在を推測し得べき理なり。然るに貴山城の方位に關する東洋學者の考案區々にして、未だ一定するに至らず。Richthofen 氏は之を今日の Khodjend の西南に位する Ura Tube 即ち唐代の窣都利瑟那、Arabia 人の Osrusna ならんといひ、(China. Bd. I. p. 451) Lacouperie 及び Bretschneider 二氏は之を Namangan の西北に當る Kâsân ならんと說き、三宅博士は此二說に疑を挾みて、之を今の Khodjend ならんと推定し、藤田文學士は Lacouperie 氏などの說に贊成して亦之を Kâsân とし、唐書に見えたる渴塞城ならんと考定せり。(慧超傳箋釋七十二丁七十三丁)而して今の Kâsân は耶律楚材の西遊錄に可傘と記せる處にて、Bretschneider 氏は元經世大典西北圖に見えたる柯散を以て之に擬し、洪鈞は唐書(卷二百二十一下)に記せる拔汗那國の名城渴塞即ち柯散ならんといひ、(元史譯文證補二十六上) Chavannes 氏は藤田氏の如く唐書の渴塞を以て今の Kâsân ならんと考定せり。(Documents sur les Tou-kiue Occidentaux. p. 273) 此城は古より東西に知られたる都城にして、其名はまた Arabia の記錄にも散見す。即ち Tabari が Kutaiba は西曆七一二年或は七一三年に Sâš, Khodjend, Kâsân を略取すと記し、Yabuki が

Fergana の地に Kâsân の名を擧げたるを始とし、其の外九世紀乃至十二世紀に亘る Ibn Haukal, Edrisi, Abulfeda 等の著書に於いても、また此城の名を記さゞるなし。又十三世紀の初葉に屬する Yakut の言によれば、當時 Kâsân は往昔の繁華を留めずといひ、十五世紀の末期に成れる Sultan Baber の自叙傳には Fergana の都 Akhsiket の北に Kâsân と稱する小都會ありと記せり。(Bretschneider-Mediaeval Researches. Vol. I, p. 52) Fergana 國の都城が時代によりて其治所を變更せしことは、漢史の方面よりも亦之を證するを得べし。唐書(卷二百二十一下)の西域傳を案ずるに「寧遠者本拔汗那、或曰鐵汗、元魏謂破洛那、去京師八千里、居西鞬城、在眞珠河之北、有大都六小城百、中略貞觀中王契苾爲西突厥瞰莫賀咄所殺、阿史那鼠匿奪其城、鼠死、子遏波之立、契苾兄子阿了參爲治呼悶城、遏波之治渴塞城、顯慶初遏波之遣使朝貢、高宗厚慰諭、三年以渴塞城爲休循都督府」とあり。此文によれば、唐代に於ける拔汗那國の最初の首府は西鞬城なりしが、其後遏塞城に移れるなり。西鞬城は Arabia 人の所謂 Akhsiket にて、(Bret. M.R. Vol. II, p. 53. Chav. Docum. p. 148)渴塞城は前にも述べたるが如く今の Kâsân なり。又溯りて隋書(卷八十三)の西域傳を考ふるに「鐵汗國都葱嶺之西五百餘里、古渠搜國也、王姓昭武、字阿利柒、都城方四里、中略東去疏勒千里、西去蘇對沙那國五百里、西北去石國五百里、東北去突厥牙二千餘里」とあり。此文中には都城の名を擧げざれども、當時の首府が今の Kâsân 即ち唐代の遏塞城なりしことは、此城より石國(Taškend)及び蘇對沙那國(Ura Tube)に至る距離の比例を得たると、漢人が此國を古の渠搜國に擬せしとによりて、之を推知し得べし。渠搜國は折支國と共に支那の古典に見

えたる西戎の一國にて、實は黄河の上流域に據れるものなるが、例の漢人の癖として、當時鐵汗國の都城が Kâsâ, Kâsân と呼ばれしによりて、之を古の渠搜國に附會せしなり。藤田文學士は隋代に於ける鐵汗國の首府も西鞬城ならんと推測せられたれど、斯くしては漢人が古の渠搜國を引き來りて、此國に擬せし理由を說明すること能はざるべし。さて如上述べ來りしが如く、今の Kâsân は古來有名の地なれば、此城を以て大宛國の都貴山城に當つるも、亦決してその理なきにあらず。

飜て Khodjend 城の沿革を稽ふるに、その由來また久しきを見る。Tomaschek 氏によれば、ギリシア人は紀元前四世紀に此地に Alexandria 城を建設し、而してその西南に接する今の Ura Tube の地には、當時既に Cyro Poris と稱する都會ありしと云ふ。漢代にありて此地方が大宛國の版圖に屬せしとは、括地志に「率都沙那國亦名蘇對沙那、本漢大宛國」とあり、又唐書（卷二百二十一下）の西域傳に「東曹或曰率都沙那、蘇對沙那、却布呾那、蘇都識匿、凡四名、居波悉山之陰、漢貳師城地也」とあるに徵して、之を知るべし。貳師城は汗血馬の產地として大宛國の名所なれば、今の Ura Tube が大宛の西境を爲しゝは明かなり。而して Khodjend の名が漢土の史書に見えたるは、唐書の西域傳石國の條に「南二百里所抵俱戰提、西南五百里康也」とあるが始なり。降りて耶律楚材の西遊錄には苦盞とあり、元經世大典西北圖には忽氊とあり。而して Cyr 河は此の城の名にて呼ばれしが故に、元史の寶玉傳には忽章河とあり、劉郁の西使記には忽牽河とあり、長春の西遊記には霍闌沒輦（沒輦とは蒙古語河の義）とあり、又明史の西域傳には火站河とあり。

(元史譯文證補二十六上)更に Arabia 史家の記錄を檢するに、Tabari は紀元七一二年に Kutaiba が Fergana にて略取せる城邑の中に、Khodjend を擧げ、Abulfeda は之を Khodjenda とし、Sultan Baber の自叙傳には此城の由來久しきを語れり。(Bret. M. R. Vol. II, p. 54—55)此の如く Khodjend は古來有名の城なれば、大宛國の貴山城を以て之に擬するも、亦必しもその理なきにあらず。

Kâsân と Khodjend とは前述の考證にて知らるゝが如く、共に上代より有名の都城なれば、漢代に於ける大宛國の首府貴山城は此二城の中に考定するを穩當とす。余輩が嘗て烏孫考を草せる時には、貴山城を以て今の Khodjend ならんと思惟せり。その理由は主として貴山なる文字の發音が Khodjend に近しといふにありき。大月氏五翕侯の一なる貴霜が Kušan の對音なることは、西方の記錄及び當時の鑄造に係る貨幣の刻文に徵して明かなれば、漢代に於ける貴字の發音が ku にして、ka にあらざりしは確かなり。且又 Kâsân は前段の例證にても知らるゝが如く、渴塞、柯散、可傘等、何れも Ka Kha 音の文字に譯せられたるに反して、Khodjend は忽章、苦盞、俱戰提、忽氊、霍闡、火站等、何れも ku, khu, hoa の發音を有する文字にて記されたり。されば漢代に貴山(Ku-san)の二字に譯出せられたる大宛の都城は、今の Kâsân にあらずして、Khodjend なるべしと思はれたりき。然るに其後更らに史記の大宛傳を精讀するに及んで、此斷定に矛盾する事實の存ずるを發見せり。其は同列傳の中に「宛王城中無井、皆汲城外流水、於是乃遣水工、徙其城下水、空以空其城(徐廣曰空一作穴、蓋以水蕩敗其城也、言空者令城中湯乏)」乃先至宛、決其水源、移之、則宛固已憂困」「聞宛城中新得秦人、知穿井、而其內食尙多」とある記事即ち是なり。此

文面によりて之を察するに、貴山城の傍を流るゝ河水は、必ずや細流にして大河にてあるべからず。若しも貴山城の臨める河水が果してKhodjend城外を流るゝSyr河の如き巨流ならんには、漢の水工爭てか其水源を決して之を他方に移し、以て城外の河水を涸渴せしむるを得べき。貴山城を以てKhodjendと考定せし余輩の說の支持し難きは、全く此點にあるべし。且またBaberによれば、Kâsân城の傍に同名の小流ありて、Akhsyの附近に至りてSihun河に注ぐと、又Bretschneider氏によれば、Kâsân河はSyr河に達するに至らずして、河水乾涸するが如しと。(M. R. p. 52)此等の事實によりても、Kâsân河が山間の溪流にして、水量の多からざるを知るべし。余輩は此等の理由を携へて、貴山城を以て今のKâsânなりと考定する說に贊同せんと欲す。

大宛の都が愈今のKâsânなるに一定せば、此處より北方千五百十里、或は西北方二千里に位する康居國の卑闐城は、果して何地に求むべきか。藤田文學士は魏代の者舌國即ち今のTaškendを以て、卑闐城に擬するが如し。其理由は魏書に者舌國は故の康居國にして、代を去ること一萬五千四百五十里、又洛那國(Fergana)は故の大宛國にして、その都貴山城は代を去ること一萬四千四百五十里とあれば、者舌即ち康居は洛那即ち大宛を去ること一千里なり。而して漢書に大宛の貴山城より康居の卑闐城に至るに北方一千五百里とあり。洛那國より者舌國に至るは一千里なれば、漢書の千五百里は大數を擧げたるなるべしといふにあり。然れども既に前にも記せるが如く、漢書には大宛の都貴山城より康居の都卑闐城に至る

千五百十里とあり、史記には康居は大宛の西北二千里にありとあれば、洛那者舌兩國の距離一千里とは、その里數に於いて已に徑庭あるのみならず、唐書西域傳の云ふ所によれば、石國即ち魏代の者舌國は康居五小王の一なる窳匿王の所領なれば、此地を以て康居王の治城たる卑闐城と考定するは、蓋し理に於いて違へり。今日のTaškendが既に康居の卑闐城にあらずとせば、此都城の所在は之を他方に求めざるべからず。若しも漢書の記す所に從て、卑闐城が大宛の貴山城より北方一千五百十里の處にありしとせば、此の城は今のTalas河或はČu河の流域に位すべき理なれど、此地域が果して康居王の直轄に屬せしや否やは、當時に於ける此方面の形勢を考究したる後にあらざれば決定すること能はず。Richthofen氏は今のTaškend, Chemkend, Turkestanを以て康居の游牧地となし、其より東北Kara Tau及びAlexandria兩山脈の北麓は烏孫の領域なりと推定せり。(China. Bd. I, p. 451)若しも同氏の說を正しとすれば、康居王の治所卑闐城は此方面にあらざりし理なれど、烏孫國の領土は果して此の如く西方に延長せしや否や。先づ此問題より解釋を始めざるべからず。

さて烏孫と康居との境界を明示せるは、漢書卷七十の陳湯傳に、陳湯が都護甘延壽と共に郅支單于を討伐せし時通過せし順路を叙したる處に「卽日引軍分行、別爲六校、其三校從南道、踰葱嶺、徑大宛、其三校都護自將發溫宿國、從北道、入赤谷、過烏孫、涉康居界、至闐池西、而康居抱闐將數千騎寇赤谷城東」とある文即ち是なり。さて此處に云ふ所の南道は、疏勒即ち今のKašgarより、Kizilsuの流域を西に上りて、Alaiの高原に至り、此處よりTerek Dabanを通過して、西北

Fergana に入る道程を指したるも、亦論を待たざれども、北道に至りては稍明瞭を缺く。然れども溫宿を發し烏孫の赤谷城を通過して、闐池の西に出づるといふにより之を考ふるに、此交通路は蓋し唐書（卷四十三下）の地理志に溫肅即ち漢の溫宿より怛羅斯城に至る道程を記したるものと吻合すと思はるゝが故に、左にその一節を載錄すべし。

一曰于祝曰溫肅、又西北三十里至粟樓烽、又四十里度拔達嶺、又五十里至頓多城、烏孫所治赤山城也、又三十里度眞珠河、又西北度乏驛嶺、五十里度雪海、又三十里至碎卜戍、傍碎卜水五十里至熱海、又四十里至凍城、又百一十里至賀獵城、又三十里至葉支城出谷、至碎葉川口八十里、至裴羅將軍城、又西二十里至碎葉城、城北有碎葉水、水北四十里有羯丹山、十姓可汗每立君長於此、自碎葉西十里至米國城、又三十里至新城、又六十里至頓多城、又五十里至阿史不來城、又七十里至俱蘭城、又十里至稅建城、又五十里至怛羅斯城。

此道程は杜氏通典（卷一百九十三）石國の條に引用せる杜環の經行記の文と對照して見るべきものなれば、またその一節を左に轉載すべし。

從安西西北千餘里有勃達嶺、嶺南是大唐北界、嶺北是突厥南界、西南至葱嶺二千餘里、其水嶺南流者盡過中國、而歸東海、嶺北流者盡經胡境、而入北海、又北行數日度雪海、其海在山嵌空萬仞、轉墮者莫知所在、勃達嶺北行千餘里至碎葉川、其川東頭有熱海、茲地寒而不凍、故曰熱海、又有碎葉城、天寶七年北庭節度使王正見薄伐城城壁摧毀、邑落零落、其交河公主所居止之處建大雲寺、猶存、其川西接石國、約千餘里、川中有異姓部落、有異姓突厥、各有兵馬數萬、城堡間雜、日

尋干戈、凡是農夫人皆擐甲冑、專相虜掠、以爲奴婢、其川西頭有城、名曰怛羅斯、石國人鎭即天寶十年高仙芝軍敗之地。

さて唐書の于祝或溫肅は漢書の溫宿にして、今の新疆省のAksuに當り、唐書の拔達嶺は經行紀の勃達嶺と同名なり。(Chav. Docum. p. 143) 頓多城は烏孫の赤山城にて、漢書赤谷城に作る。此書の西域傳によれば、赤谷城は溫宿の北六百十里に在りと記されたるに、唐書の云ふ所にては、僅百二十里に過ぎず。眞珠河は突厥のJänčü河と同義にて、Syr河の上源流に相違なきが、Chavannesは之をAjak-tachと考定し(Docum. p. 9.) Barthold氏は之をNaryn河の支流Kara-šai或はGau-gurekならんと推測せり。(Zur geschichte des Chrtstentum im Mitterasiens. p. 70) 雪海に就いては、Hirth氏は之をSon-kulに當てたるに、(Nachworte zur Inschrift des Tonjukuk. p. 71) Barthold氏は之をBel-kulに擬せり。(p. 70.) 又Chavannes氏は叉驛嶺をDjilym-belとし、(p. 9) Hirth氏は碎ト水をKaškar谷を流る碎葉水の上流と說けり。熱海は言ふまでもなく今のIssik-kulにて、漢名は此のTurk語の對譯なり。Barthold氏は唐書の凍城賀獵城葉支城裴羅將軍城を此湖水の南方に在りと解したるに反して、Chavannes氏は之をその北方に求めんとせり。碎葉はTabariにいふ所のSuj-ābにて、今の吹河を指す。(Marquart, Die Chronologie der altturkischen Inschriften p. 56. Hirth. Nachworte p. 73.) Suj-ābよりTalasに至る地名はArabia人の紀行によりて說明せらるゝもの多ければ、左にDe Goje氏がIbn Chordādbeh及びKudāmaに據りて記せる道程を引用すべし。

Talas ヨリ　下—Nušağan = 3 parasangs

Kasra—bas = 2 〃

Kul—šub = 4 〃

Gul—šub = 4 〃

Kulân = 4 〃

Birky

(Mirky) = 4 〃

Isbra = 4 〃

Nûzkat = 8 〃

Charanğawân = 4 〃

Ğul = 4 〃

Sârig = 7 〃

此處ヨリ突厥ノ牙ニ至ル = 4 〃

لرمراو = 2 〃

Newâket = 2

Banğiket = 1

Suj-āb = 2 〃

上—Nušağan = 15 日程

(Barthold. p. 33—34)

Tomaschek 氏は之に唐書の地理志を參照して、左の如き解釋を下せり。

(1) Tarāz は Aûlie-atâ の南に位する Talas.。

(2) Kasra-bâs は Aûlie-atâ。

(3) Kûlân は Tarty にして、唐書の俱蘭城。

(4) Ašbara は Asbara 河上の Tcharčawar にして唐書の阿史不來城。

(5) Nûz-kat は Aksu ならんか、之を Tûm-kat とよめば、唐書の凍城か。

(6) Ǧul は Pišpek

(7) Šarig は之を唐書の米國に當るとすれば Mârgh とよむべし。

(8) Karluk 可汗の牙帳は玄奘によれば、碎葉水上にありとらへり。 Sui-ye-šui は Tokmak 附近。

(9) Snj-âb は Issik-kul 湖の西岸にあるべし。

玄奘三藏が跋祿迦國より咀邏私城に至れるときに通過せる道路は正しく此山道なれば、西域記に凌山とあるは天山の Muzart 嶺にあらずして、實は唐書の勃達嶺即ち今の Bedel 峠をいひしものなり。此解釋を始めて唱へ出しは Richthofen 氏なりしが、(China. Bd. I. Tafel 9) 當今は氏の說に從ふもの多きが如し。然し Bedel 峠を凌山或は氷山と稱するに就きては、尙ほ疑を懷くものなきにあらず。因て余輩は玆に Bedel 峠の氷山なる一新事實を提供して、Richthofen 氏の說を一層確實ならしめんと欲す。三州輯略卷七之藝文門上、氷山贊に曰はく、

伊犂之南渡渾河五六百里、有氷山焉、俗名八達坂、爲適葉爾羌西藏要路、其氷一日數折、亦終古莫解、高撑層霄、下絕九地、分軫陰陽、回轉日日、過此坂者、必以子夜、人馬半道、亦輒聞天傾地裂之聲、或竟有陷入無間者、開合既倏、孰窺神奇、呼吸未周、已別人鬼、每星郵羽檄、取道於斯、雖蚊行蟻步、蛇枉魚擘、咸震慄失形、回皇墮魄、然舍此以往別無他道、若天風不鳴、月魄晃朗、陟其巔者、入輒聞百丈以下絃管絲竹嘽々並擧、聆其淸絕肖子夜、或以爲流澌沙石上下搏擊、其幽咽吞吐、響或類斯、亦卒莫究其奇英、主宿頓者、必日撥回戶二十、鑿氷棧氷、梯以通過客、余偶隨將軍至此、既目其靈異、又莫測幽隱、爰爲之贊曰、

陰陽顯晦、倏爾萬變、飛仙失足、亦墮無間、氷梢爍日波末波閃電清商夜、聆奇鬼畫見危、玆達坂、高乃百盤、南馳于闐、北走大宛、洶々隆々、地軸半折、熇々爍々、天宇五色。

此文は文筆を弄して頗る誇張の嫌あれども、玄奘の西域記一卷に凌山の光景を叙して、「山谷積雪、春夏合凍、雖時消泮、尋復結氷、經途險阻、寒風慘烈、多暴龍難、陵犯行人、由此路者、不得赭衣持瓠大聲叫、微有違犯、災禍目覩、暴風奮發、飛沙雨石、遇者喪沒、難以全生、山行四百餘里至大清池」とあるに對照するときは、此山道の險難尋常にあらざるを想見すべきなり。烏孫の都赤谷城は勃達嶺より北五十里に位し、地勢高峻なれば、冬期の住地としては、甚だ不適當なるを見る。思ふに烏孫も他の游牧民族の如く、冬夏の二期に住居を異にせしにならざるなきか。然らば赤谷城は夏期の住地即ちYaylak の地にして、冬日に至れば、北方の平原に移りて放牧せしなるべし。さて漢書に烏孫の都は赤谷城と明載せるにも拘はらず、唐書には赤山城と記せり。今葱嶺の南部 Taš-Kurgan の近傍を Sari-kol と稱するは、Turk 語にて黃谷の義なれば、烏孫の都城のありし地方は、漢代土言にて Kizil—kol と呼ばれたりけんを、漢にて之を赤谷と譯せるならん。西域の都護甘延壽の兵は此城を通過して、闐池の西に至れりとあれば、此湖水が唐代の熱海即ち今の Issik-kul なるべきは、想像するに難からず。此海水は盛冬に至るも凍合せざるが故に、之を Turk 語にて Issik-kul (熱海の義)といひ、また鹹味を有するが故に、之れを Turk 語にて Tus-kul 即ち鹽池といひ、又鐵氣を含むが故に、蒙古人は之を Temurtu Nôr 即鐵池といふ。此の如く此海水は種々の名稱を有すれども、Turk 人は總て大なる湖水を tengis, dengis

といへば、漢書の闐池はこの對音にてあるべきか。さて康居と烏孫との境界が此海水の西にありしことは、漢書の文面にて明瞭なれば、此海水の西方に連亙するTnruaigyr山脈は、兩國の界線を劃せしならん。

爰に陳湯等が攻擊せし北匈奴の郅支單于は、先きに堅昆の地に王庭を設け、丁令呼揭の諸族を領して、暴威を極北に震ひしが、その後康居王の招請に應じて西南に移轉し來り、康居の領內に牧地を定めたり。漢書の匈奴傳を讀むに「會康居王數爲烏孫所困、與諸翕侯計、以爲匈奴大國、烏孫素服屬之、今郅支單于困阨在外、可迎置東邊」とあり。此文の如くんば、康居王が郅支單于を招請せしは、主として烏孫に當らしめんが爲なれば、その住地として與へられたる方面が、康居の東境に屬して、而も烏孫侵冦の要衝に當りしは怪むに足らず。而して郅支單于が康居王の好意を諒として、その委託に負かざりしは、陳湯傳に「郅支數借兵擊烏孫、深入赤谷城、殺略民人、歐產畜、烏孫不敢追、西邊空虛、不居者且千里」とあるにて知るべし。文中に西邊とあるは、烏孫の西邊なれば、烏孫の西境と郅支の住地とが接近せしは勿論なり。而してまた同傳に「今郅支單于威名遠聞、侵烏孫大宛、常爲康居畫計、欲降服之、如得此二國、北擊伊列、西取安息、南排月氏山離烏弋、數年之間城郭諸國危矣」とあるによれば、郅支の住地が伊列國の南方に位せしを推知すべし。伊列は今の伊犂河より其名を得たるものと思はるれば、此河の流域にありしは亦論なけれど、此の上流域は烏孫の領內に屬したれば、伊列國は此河の下流域にして、Balkhaš湖に臨める地域なるべし。若しも此推測に誤なしとすれば、郅支の根據地は

已に熱海の西 Alexander 山脈の北麓に沿ふたる處なるべしと思はれたるに、また陳湯傳を見るに、「郅支單于自以大國威名尊重、又乘勝驕不康居王爲禮、怒殺康居王女及貴人人民數百、或支解投都賴水中、發民作城、日作五百人、二步廼乃」とあり、又「至郅支城都賴水上」とあれば、余輩の想像の決して虛妄ならざるを悟るべし。何となれば文中に見えたる都賴水は、唐代の咀羅斯河即ち今の Talas 河なるべしと思はるればなり。郅支單于の據れる郅支城が已に Talas 河なりとすれば、漢の兩軍が押し寄せたる順路は察するに難からず。即ち北道の三校は Issik-kul 湖の西より Alexander 山脈の北麓に沿うて Talas 河に向ひ、又南道の三校は Andjidjan あたりより西北に進軍し、Chatkal-urtuk tau を越えて Talas 河の上源地に出て、此處に北道の兵と會合して郅支城に迫りしなり。Hirth 氏が郅支單于の據れる地域に關する考察は、余輩の見る所と大に異るものあるが故に、左にその一節を譯出して之を示すべし。

郅支は Kirgiz の地より康居に赴ける時、寒苦の爲に其人民の大部分を亡失せり。即ち怯弱のものは途中に滯留し、僅五百人のみが康居に着し、「西邊空虛不居」の地に住居を定めたり。さて此小部族は途中にて頓挫せし大部族の遭遇せし困苦に堪へたる程の氣力を有せしより之を見れば、その精選の民たりしに相違あるべからず。漢書の文を案ずるに、康居は一半は城廓を有し、一半は游牧を業とする民族より成れる國なり。而して前者は Samarkand を首として Zar-afšan 河の流域とその近傍とに據り、後者は此國の北部にて Balkhaš 湖と Aral 海との間に據れり。而して郅支の住地として定められたるは、後者の地域に屬

せしなり。郅支は此處に根據を堅めて、其威聲遠近に鳴り響き、遂には康居王の女と其人民數百名とを殺戮せしかば、その姻者にしてまたその恩人たる康居王に至るまで、之を畏れ惡むに至れり。漢史によれば、郅支は闔蘇大宛等の數國に命じて、貢賦を納附せしめたりとあり。闔蘇二字の福州音は Hak-su なれば、之を Ar-su の對音と解し、西史の Aorsi, Alano-orsi に當つるを得べし。顏師古の注によれば、「康居北可二千里有國、名曰奄蔡、(Aorsi) 一名闔蘇」とあり、又大宛は今の Fergana を含み、その北部は後の石國即ち今の Taškend をも包轄せり。此等の國が郅支に貢賦を上れりとせば此等の地は郅支の領せる匈奴と境界を接せしなるべく、而して單于の領域は Aorsi 或 Alan (闔蘇) の東境と Taškend, Fergana (大宛) の西北境との間に亙りしならん。今一層精密に之を述ぶれば、この不屈不撓の精神に富める郅支匈奴のよれる地域は、Jaxartes 河の沿岸にして、而もその Aral 海に注ぐ附近にあるべし。(Über Wolga-Hunnen und Hiung-nu p. 272)

郅支單于の據れる地域に關する Hirth 氏の考察は、余輩の見る所と全く正反對に出でたり。想ふに同氏は漢書陳湯傳に記せる「西邊空虛不居者且千里」とある文面を誤解せしにあらざるなきか。此處に西邊とあるは前にも述べたるが如く、烏孫の西邊にて、康居の西邊にあらず。然るに Hirth 氏は之を以て康居の西邊と見たればにや、郅支單于の住地を Jaxartes 河の河口に置きしならん。且また康居王がその國の東邊を割いて郅支に與へたることは、陳湯傳に明載したれば、同氏が單于の放牧地を此國の西邊に假定せしは、此點より見てもまた誤

謬たるを免かれず。さて以上考證せし所に從つて、郅支單于の根據地が愈 Alexander 山脈の北麓にて、東 Issik-kul 湖より西 Talas 河の左右に及びたりとせば、Richthofen 氏が此地域を以て烏孫の領內と見たることの誤謬なるは明白なると共に、康居王の都城たる卑闐城が、此方面になかりしことも推知せらるべし。

卑闐城が Talas 河或は Chu 河の流域に在らざりしとせば、此城の位置は史記大宛傳のいふ所に從て、之を大宛の都 Kâsân より西北の方向に求めざるべからず、此方向に於いて今の Taškend は Kirgis 人が冬期集合する處なれども、此地は前にも述べたるが如く Kâsân 城より一千里ばかりの距離にして、史記漢書に卑闐城は大宛の都より千五百里乃至二千里とあるに合はざるのみか、唐書の記す所によれば、當時の石國即ち今の Taškend は康居小王窳匿王の所領なれば、愈之を以て康居王の治城たる卑闐城とは見難し。此城は康居王冬期の住所なれば、氣候溫和にして糧食燃料等を得るに便なるの地ならざるべからず。此等の事情と大宛の都城よりの距離とを合せ考ふるに、卑闐城は今の Cimkend より Turkestan に亙る地域に求むるを至當とす。此等の地は北方に Kara Tau 山脈を繞らして朔風の寒烈を防ぎ、加ふるに土地は比較的に豐肥なるが故に、冬期の住所としては最も適當の地なり。後世此地方にて最も著はれたる都會を Sairam, Otrar, Barčin の三城となす。Sairam は Cimkend の東六哩半の處に位す。此名は Arabia の古記錄には見えざれども、十四世紀の前半に屬する Mesulek Alabsar に至りて始めて著はれ、また Rashid-eddin の史書にも載せらる。漢史の方面にては主と

して元代の記錄に散見す。例へば元史薛塔剌海傳及び經世大典西北圖に賽蘭とあり、長春の西遊記に賽藍城とあるの類即ち是なり。Otrar の名は十二三世紀に屬する Arabia の記錄に見ゆれど、その故稱たる Farab の名は九世紀より十二世紀に亙る書類に散見す。(Bret. M. R. pp. 56—57)漢史の方面にては西北圖に兀提剌耳とあり、西遊錄に訛打剌城とあり、元朝秘史に兀答剌兒とあり、又 William Rubruck の紀行には Syr 河の下流域に荒廢せる城址の許多存在せるを記し、而して當時此地方に Iancking 及び Barčin と呼ぶ二城ありしを云へり。Iancking は Syr 河の河口より一日程の河畔に位する Yangi-kand を謂へるは確かなれど、Barčin の所在は未だ詳かならず。此名は元史本紀には八兒眞とあり、西北圖に巴耳赤邦とあり。(元史譯文證補二十六下)此等の城は何れも後世に屬し、漢代のものにあらざれども、而も之によりて此方面の地域が都會を建設するに適せしを證すべし。卑闍城の名は元代の Barčin と音聲に於いて聊か類似すれども、その果して同名同地なりしや否や、固より之を知るに由なし。Cagatai 語にては城堡を bičin といひ Osman 語にて之を bižan といへば、卑闍は或は此對音なりしやも知るべからず。(Šejx Sulejman Efendi's Čagatai-osmanisches Wörterbuch. p. 26)

Watters 氏は西域記解釋颯秣建國 (Samarkand) の條下に此國の都城の別稱として、阿祿廸城及卑闍城の名を擧げたり。(On Yuan-Chwang. Vol.I.p. 93)阿祿廸城は正しく康國即ち Samarkand の城名なるが、卑闍城は康居の首府にて全く別處なり。然るに Watters 氏が卑闍城を以て Samarkand 城の一名と解けるは、康國と康居國とを同名同處と信ぜる泰西學者の謬見に侵され

たるのみ。又同氏は樂越匿の名をRavaniと解けるが、その何の故たるを知らず。尤も樂はlakと音じ、越は廣東にてvatと音じ、又匿が古に於いてもna,niと音ぜしことは、梵語nikchêpaのni、Prasênadîtiのnaを匿にて譯し、(Julien, Methode pour dechiffrer et transcrire les noms sanscrits. p. 161) 又唐書西域傳にArabia人のOsrusnaを蘇都識匿とらひ、Kûsaniyaを貴霜匿とらへば、Waters氏が樂越匿三字をRavaniの對音と見たるはさることながら、漢時代の發音が果して斯る考定を許すべきや否や。康熙字典によれば匿、集韻惕得切音忒とあり、我國に傳はれる字音もまたtokuなれば、此文字にtokの發音ありしは確かなり。而して宮崎博士は史學雜誌（第七號五七頁—八〇頁）に掲げたる日韓兩國語の比較研究と題せる論文の中に於いて、匈奴語の服匿は國語のhotogi、韓語のpat'angiと同語なるを證せられ、又余輩は之を蒙古語及び滿洲語のboton, buttonと比較すべきを論じたれば、匿字は漢代にtokと響きしなり。果して然りとせば、康居の樂越匿はlak-üt-tok或lok-üt-tokと音ぜしものと見て、之が解釋を試みざるべからず。さて西陲總統事略（卷十一）哈薩克源流の條を見るに、哈薩克の部落に阿塔海、阿爾幹鄂托克、瑚蘭索、阿爾幹鄂托克、巴々散、阿爾幹鄂托克等の如く、鄂托克の名を有するもの甚だ多し。Radloff氏によればTeleut語にtemeçiの部曲をottokとらふ。(Versuch. p. 1115. b.) 哈薩克の鄂托克は蓋し此ottokの對音なり。而して康居語樂越匿の越匿(üt-tok)は此のottokの音譯にあらざるなきか。鄂托克の制に就いては、西陲總統事略（卷十二）厄魯特舊俗紀聞の條に、昔準噶爾厄魯特未滅時、分統四衛拉特皆有大台吉、主之、亦稱汗、餘小台吉皆汗之宗屬爲之、其臣下謂之宰桑、大臣稱

圖墨什、其次稱札爾扈齊、佐圖墨什理事者、其汗所屬人戸曰鄂拓克、台吉所屬曰昂吉、猶部分也、鄂拓克游牧環其汗所居、昂吉游牧環諸鄂拓克」とあり、又三州輯略卷七之に「至準噶爾舊制、有四衞拉特、二十四鄂托克、九集賽、二十一昂吉之名、四衞拉特分統準噶爾全部、皆有大台吉主之、亦稱汗、餘小台吉皆汗之宗屬爲之、鄂托克爲汗之屬、昂吉爲各台吉之屬、鄂托克游牧之地環於伊犂、昂吉游牧又環諸鄂托克、視八旂都統、昂吉視外者督撫、昂吉準語部分也、集賽專理喇嘛事、亦各領以宰桑、當爰夷蘊崇之後、制度一新、其事皆不復倣行」とあり。準噶爾は西人の所謂 Kalmuck にて蒙古種に屬し、Turk種の哈薩克とは種類を異にすれども、其鄂拓克、鄂托克は全く哈薩克の鄂托克と同語なり。Kowalewski 氏によれば、蒙古語に部落を otok とゝ。(p. 387. b) 而して此の otok は Turk 語の ottok と同語なり。又準語の宰桑、集賽は蒙古語 dsaissang の對音にて Turk 語 dsaissan と同じく、準語の圖墨什は Turk 語 (Teleut. Lebed. Altai) の temiści と均しければ、此制度は中亞細亞に於ける Turk 及蒙古の兩民族に亙りて共通のものたりしや明かなり。されば今の Kirgiz Kasack(哈薩克)に擬すべき古の康居の越匿(üttok)は、上の otok. ottok (鄂托克)の對音にして、唐居大王に隷屬せし部族を稱せしものならん。又Turk 語にて大を ulu, ulug とゝへば、康居の樂越匿の樂(廣東音 lok)はこの Turk 語の對音ならん。漢人の譯法として外國語の母音を以て始まるものは、往々省略せらるゝことあり。例へば梵語の Arahat を羅漢と譯し、契丹語の atirkan を忒兒塞と譯するの類即ち是なり。且また Turk 語には r l 音にて始まる言なければ、康居語の樂越匿の頭首に省略あるべきは、察するに難からず。若しも此等の論證に誤

謬なしとすれば、康居語の樂越匿はTurk語のulug, ottokの對音にして、康居王に隸屬せし大鄂托克を指していへるなるべし。又漢書の康居傳によれば、此國に五小王ありて、其一を窳匿王といひ、窳匿城に治せり。而して唐書によれば此國は唐代に石國といひ、今Kirgiz Kasack人が冬期集合するTaškendなりとす。因て思ふに此窳匿(yü-tok)も上の越匿(üttok, yüt-tok)と均しくTurk語ottokの對音にして、小王の鄂托克地なりしによりてその名を得たるものか。

康居の名稱及び種類に就いては、從來東洋學者の間に種々の議論ありて、未だ一定せず。Tomaschek及びReinaudの二氏はAvesta經典に見えたるKaŋhaa及びKangを以て漢史の康居と同名なりと考定し、(Tomaschek, Centralasiatische Studien p. 135—136.) Barthold氏によれば、今のChudeinkentの附近Circik河の沿岸にKenkrakと稱する都會あり、又Syr河の右岸を距る二十吉米の處にAngrenと呼ぶ河ありて、その沿岸に位するAk-Qurganの附近にはKangu或はKankaと稱する墟址今に猶ほ存在すといひ、又唐書の西域傳によれば、石國即ちTaškendに瞰羯城と稱する處あり。此等の名稱は何れも康居と緣因あるべしと想像せられたり。Marquart氏は突厥の碑文に見えたるKängäresと稱する民族をKonstantinos Porphyrogenetosに Pečenegの一種と記せるKaryapならんといひ、又Ibn Chordadbiに Šaš即ちTaškend邊よりSyr河の下流域にかけて、Kankarと呼べる民族の據れりとあるに徵して、此民族はPurophyrogenetosのKaryapに關係あるべしと推測し、而してKängäresは八世紀の頃にAral海の沿岸及びSyr河の下流域に住居せりと論斷せり。(Die Chronologie p. 10) 果して然らば漢代の康居はその住地に於て又そ

の名稱の音聲に於て、共に此Kangarと比較考定を許すが如し。又此地方と懸絶せる處にもKengerの名稱に類したる民族あり。例へば今のTranskaukasiaにKengerと呼ぶ民族あり、又Gökr-čai KubaおよびTeheranにKengerluと稱する部落あるが如き是れなり。Radloff氏は康居をTurk種に屬するKanghlyなりと考定せり。(Kudatku Bilik. p. VII.) 此の名は元時代より東西の記錄に散見す。例へばRubruckの紀行にはCangleとしCangitaeとしひ、元代の漢史には康里とかき、Arabiaの記錄にはKankaliと見え、十三世紀の初にUral河より以東Issik-kul湖の間に互る曠野に遊牧せり。(Bret. M. R. Vol. I. p. 301) 然れば元代のKangliはその住所に於て、又その名稱の音聲に於て、共に漢代の康居と比較考定を許さゞるにあらず。然れども康居の後に現はれたるUgar, Kängäresが、元代の史上見えたるKangliと同名にして、而もまた同部族なりや否やの問題に至りては、大に考究を要する問題なり。Rubruckによれば、CangleはComanの一種なりとしひ、Konstantinos Porphyrogenetosの言によれば、KangarはPečenegの種類なりとしへば、此二民族がともにTurk種に屬するに於ては、亦疑を容るべからず。

Tomaschek氏は康居の名はIran語にて解釋するを至當とすと言はれたれど、是れ畢竟同氏が康國即ちSamarkandを以て康居の本地と爲す謬見に基ける議論なれば取るに足らず。又Vámbéry氏が康居をUigur語廣の義を有するkäng、Cagatai語同義のkänと考定したるも如何にや。(Tomaschek. Centralasiatische Studien p. 135.) Abulghaziは Kankari の kan を車の義なり

と說けり。Uigur 語にて車を kang とふひ、Koibal 語にて kanga とふひ、Krim 語 Čagatai 語にて kangli とふへば、Abulghazi 氏の解釋は蓋し正鵠を失はざるべし。想ふに此民族が Kangli の名を得たるは、宛も Selenga の流域に據れる鐵勒部が高車と呼ばれたるが如く、高輪の車に乘りしが故なるべし。又 Kangar の名義に就ては、Konstantinos Porphyrogenetos は之れを高貴、强健の謂なりと說けり。さて Čagatai 語にては勇健を kongar とふひ、Osman 語にて之を kingir といひ、共に Kangar と同語なるべしと思はるればPorphyrogenetos の解釋は決して杜撰のものと云ふべからず。如上の考證によれば、Kangli と Kangar とは自ら別稱にして、之を混同すべきにあらず。況んや一方に於いて現今 Köngür, Kenger と稱する Turk 民族が存在すると共に、また一方に於いては Nogai Tatar の間に Kangli とふふ民族あり、(Klaproth. Tableaux historiques de l'Asie. p. 279) 又 Zarafšan 河の流域に住する Üzbeg 族の中にも、同名の部落ありとふふに於いてをや。此の如く Kangar と Kangli とは截然と區別せられて、また其間に混同を許されども、たゞ康居は此民族の內何れに該當すべきものなるか。康居はその住域に於いてまたその音聲に於いて、Kangar 及び Kangli の何れにも比較し得べきが、Kangli の名は八九世紀の頃より已に西史に現はれたるに反して、Kangli の稱は漸く十三世紀の頃に至りて記錄に見えたるを思へば、漢代の康居は寧ろ Kangar に當つるを穩當とすべきか。

康居民族が Turk 種に屬することは種々の點より之を考察し得べきが、其王が bi と稱せしが如きも、亦その一證と見るを得べし。晉書卷九十七の康居傳を案ずるに、其王那鼻といふもの

使を晉に遣はして入朝せしめたることあり。此王の名は烏孫王の泥(廣東音Nai)靡と比較すべきものなり。烏孫國の王名には某靡と稱するもの甚だ多し。而して此靡がTurk語君主の敬稱たるbiの對音たることに就いては、余輩嘗て之を烏孫考に於いて述べたり。漢代に於ける北族の種類を案ずるに、匈奴東胡は蒙古系統に屬するものなるが、烏孫、康居、大月氏等はTurk系統に收むべきものなり。故に匈奴の君主が單于と稱したるに對して、烏孫、康居の君主は昆靡或は靡と呼べり。此靡が尊稱なることは、漢書(卷六十一)李廣利傳に大宛の貴人勇將煎靡の注に「顏師古曰、宛之貴人爲將而勇者名煎靡」とあるにても證すべし。Turk語族の中突厥語にて戰爭、鬪爭をsönüš とらひ、(Radloff. Die alttürkischen Inschriften der Mongolei. p. 133. a) Čagatai語にて鬪爭をženžal とらひ、(Šejx Sulejman Efendis Čagatai-Osmanisches Wörterbuch. p. 52) Osman語にて戰爭をdjenk とらひ、Uigur語にてsugušとらひ、Kusnezk語にてžäg とらへ。(Klaproth. A. S. XXXII) 因て案ずるに大宛語煎靡の煎(愈音延反子)は突厥語のsönüš、Osman語のdjenkなどの對音にて鬪爭の義なるべく、而して靡はTurk語biの音譯なれば、煎靡はdjenk-bi或はsönüš-biの對音にて、戰君といふ程の義なり。大宛國の土民がIran種にしてTurk種にあらざることは、史記漢書の大宛傳を見ても之を知るべしと雖も、其君主及貴族は大月氏が大夏に於けるが如く、康居、烏孫と同じく勇悍なるTurk種たりしを察知するに難からず。大宛の煎靡を說くによりて、思ひ出されたることあり。其は唐書(卷二百十一上)の西域傳安國即ちBokhāraの條に「募勇健者爲柘羯、柘羯者猶中國言戰士也」とあり、又玄奘の西域記(卷一)颯秣建國即Samarkandの條に

「其豪勇、隣國承命、兵馬强盛、多是赭羯、赭羯之人、其性勇烈、觀死如歸、戰無前敵」とある文中に見えたる柘羯、赭羯の名即ち是なり。此名は大宛語の煎靡の煎と語源を同じうするものと思はるゝが、殊に Uigur 語の Suguš、Kusnezk 語の šag などゝ近き原語の對音にて、戰爭、鬪爭の義より一轉して、此處には戰士を呼ぶ名となりしものならん。Bokhāra, Samarkand 邊の土民は其頃に於いても無論 Iran 種なれど、其君主及び兵士は勇悍なる Turk 人なりしが故に、戰士はその國語によりて赭羯即 (šagas.) suguš と稱せしなるべし。Watters は此名に就き臆說をなして曰はく「Samarkand より西北に方りて Chalak と稱する都會あり、此附近の住民は體軀長大にして勇健なりしが故に、其頃多く兵士として募集せられたれば、かの赭羯はこの Chalak か、然らざれば當時 Takka などともいひけん國のありしを、赭羯にて譯せるものならんかと。（On Yuan Chwang Vol. I. p. 94）又 Marquart 氏が Chavannes 氏の問に答へたる所によれば、赭羯、柘羯は Persia 語 telâkar の對音にて、元來は奴僕、從屬 (servus, famulus) の義なれど、Sogdiana にては戰士（衛士）をいふ名に轉ぜしならんといへり。（Documents sur les Toukiue Occidentaux. p. 313）

康居の東境及びその都城の位置は大略說き盡したれば、是より其西境に就いて述ぶる所あるべし。史記の大宛傳によれば「奄蔡在康居西北可二千里、行國、與康居大同俗、控弦者十餘萬、臨大澤無涯、蓋乃北海云」とあり。康居の都卑闐城が大宛の都貴山城即ち Kâsân より西北千五百里乃至二千里にありて、其方位は大抵今の Turkestan 附近なりとすれば、此處より更に西北二千里の距離にして、而も岸涯なき大澤に臨む奄蔡國が、Aral 海の沿岸にありしことは

殆ど疑を容れざる所なり。然れども漢人の所謂大澤或は北海は專らAral海を指して、裏海を包含せざりしや否や。之を西方の記錄に徵するに、西域の人にしてAral海の存在をおぼろげにも書き記ぜるは、六世紀の末に屬するMenandrosにして、而も之を確然と認めたるは、十世紀の初に生存せしArabia人Istachryなりとす。(A. Humboldt, Asie Centrale. Vol. II. p. 156—158) 然れば極東の支那人が漢代に於いて果してよく此湖水と裏海とを區別する程の地理上の知識を有せしや否や。漢書西域傳于闐國の條に「于闐之西水皆西流、注西海」とある西海の裏海なるとは、一般に認めらるゝ所なれば、此文面のみによりて之を見るときは、漢代の支那人は奄蔡の北海と此の西海とを區別せしが如くに思はるべし。然れども同書烏弋山離傳を案ずるに、「西與犂靬條支接、行可百餘日、乃至條支國、臨西海」とある處に見えたる西海は、波斯灣を指したる者と思はるゝが故に、漢人の所謂西海なる名稱は甚だ漠然たるものなるを察すべく、從て裏海を西海といへるに於いても、必しも此海水に就いて精細なる地理上の知識を有せるものにあらず。又古代の支那人が所謂北海なるものも、必しも一海を限りて之を稱せしにあらざることは、漢書蘇武傳に記せる北海が、今のBaikal湖を指せるものなるによりて之を知るべし。之を要するに古代の漢人は南方より進み行きて、北方に遭遇せし大湖水を總て北海と稱し、又東方より進み行きて、西方に遭遇せし大湖水或は海水を悉く西海と呼びしなり。されば漢代の支那人は大宛より西北方に當りて、奄蔡に大海あるを目擊し、或は傳聞せるによりて、之を北海といひ、又大月氏より西方に當りて、大海あるを目擊し或は傳聞せ

るが故に、之を西海といへりしなり。されば漢書奄蔡國の條下にいへる北海も、于闐國の條下に記せる西海も、均しく同一海水を指したる者とも解せらるべし。而して康居國より西北二千里の處に位する大澤即ち北海はAral海を指せりと思はるれど、當時の漢人が此海水と裏海とを區別せるや否やは疑問なり。又西方の記錄を案ずるに、Herodotos, Aristoteles は裏海を正しく內海と見たれども、Alexandros 大王に從へる記者をはじめとし、其より以後 Eratosthenes, Strabon, Pomponius Mela, Plinius, Plutarque, Arrien 等何れも裏海を以て北海の內地に灣入せるものと誤解せざるなし。（Humboldt. A. C. p. 157.）因て或は漢書奄蔡傳の北海を、此と均しき意味に解釋せんと欲するもの出て來らんも測られざれども、其は最も皮相の見にして、漢人の思想を深く考察せざるものなり。漢人の所謂北海は必しも之を外洋と見るべき必要なければ、奄蔡傳中の北海はAral海と裏海とを包容せる、漠然たる意味の內海と解するを穩當とすべし。さて奄蔡傳の北海は此の如く了解せらるれども、康居國より西北二千里の處に放牧せる奄蔡國は前にも述べたるが如く、之を今のAral海の沿岸にありしものと見るべし。尤も此民族の一部分は裏海の北岸にも延長したらんが、其は漢人の知る所に非ざりしなり。奄蔡國の境疆に關して此の如き見解は、また此民族に就いて西人の記す所と矛盾せざるを知る。奄蔡は一名闔蘇ともいひ、ともにAlanの別稱たる Aorsi, Asu なることはHirth氏の已に說けるが如し。而してAlanの名が西方の文書に見えたるは、Deuys de Charax の地理詩に書かれたるが始なり。此書の成れるは Augustus 帝治世の末期に屬すと信ぜらる。而して

此皇帝の死去は紀元十四年にあれば、Alanの名が羅馬人に知られしは、紀元の初年にありしなり。而して紀元四〇年或は四五年に書かれたるStrabon及びPomponius Melaの記錄に、Alanの名未だ記されざるを以て之を察するに、此民族は少くとも一世紀の前半には未だKaukasusの北麓及び黑海の北岸に於いて大なる勢力を發展せざりしなり。(V. St. Martin. Etudes du Géographie Ancienne. T. I. pp. 123—124) 此の如き形勢はまた漢史の方面よりも、之を證明し得べし。後漢書(卷十八)の西域傳康居の條に「奄蔡國改名阿蘭聊國、居地城屬康居、土氣溫和、多槙松白草、民俗衣服與康居同」とあり、又魏志(卷十三)に引ける魏略に「轉西北則烏孫康居、本國無增損也、北烏伊別國、在康居北、又有柳國、又有巖國、又有奄蔡國、一名阿蘭、皆與康居同俗、西與大秦、東南與康居接、其國多名貂、畜牧逐水草、臨大澤、故時羈屬康居、今不屬也」とあり。此等の文によりて奄蔡の一名が阿蘭たることも、また此國が素と小國にて康居に羈屬せしことも知らるるなり。但し魏略によれば、阿蘭は三國時代には獨立國なりしが、故時は康居に羈屬せりとのみありて、その年代を明示せず。後漢書によれば、阿蘭聊國は後漢時代に康居に隷屬せる趣に書かれたれど、此書の編纂は魏略の後にあれば、魏略に故時とあるを解釋して、後漢時代と考定したるやも知るべからず。西方の記錄によれば、後漢の頃にAlanは黑海の北岸及びKaukasus山脈の北方に於いて既に强盛となりしと思はるれば、此時代に猶康居に羈屬せしといふ後漢書の文は疑はしけれど、前漢の末葉より後漢の初年にかけて、阿蘭は尙小國にして康居に隷屬せしものならん。Deguignes氏に從へば、Alanはもと Transoxiana の北方に住せしが、紀元前

四十年頃より西方に移轉し始めたりといふ。(Histoire des Huns. T. I. p. 270)果して然らば史記漢書の奄蔡を、Aral 海の沿岸に游牧せし民族と考定せし、余輩の見解の決して虛妄にあらざるを悟るべし。而して康居と奄蔡とが如何なる地點に於いて其境界を接觸せしか、固より正確なることは知るに由なけれど、後段に說かんが如く、康居が今の Khiva を領せるによりて之を察するに、Aral 海の東沿岸は康居の版圖に屬せしものならん。

奄蔡即ち阿蘭の種類に就いては、或は之を Teuton なりといひ、或は Osset なりといひ、或は Turk なりといひ、或は Finn なりといひ、議論區々にして未だ一定せずと雖も、漢人に知られたる奄蔡國の大部分を構成せし民族は、康居烏孫等の如くに Turk 人ならんと思惟せらる。隋書卷八十四の鐵勒傳にその種類を擧げて「拂菻東則有恩屈 (Ogor, Ugur) 阿蘭 (Alan) 北褥九離 (Baškir) 伏嗢昏 (Bolgar) 等」といひ、阿蘭を以て鐵勒即ち Turk の一種と見做せり。漢土の歷史家は人種學者にあらざれば、隋書が鐵勒の中に阿蘭を數へたりとて、必しも之を理由として阿蘭は Turk 種なりと斷言すべからず。然れども北方民族の慣例として、一國或は一部落が勢力を得て、數多の邦國を併呑するときは、此等の國々をして自國の名を稱せしむるが故に、均しく阿蘭の名を負ふ民族にありても、西方に現はれたる阿蘭の中には、Arya 種の民族を多く包含し、東方に知られたる阿蘭の中には、Turk 種或は Finn 種を多く混合せしは、勢の然らしむる所なりとす。然れば奄蘭、阿蘭が何人種に屬するかは、他日の問題として、今茲に奄蔡語として傳へられたる一語を擧げて、之が解釋を試みん。元史譯文證補七二十西域古地考一、康居奄

蔡の條に「耶律鑄雙溪醉隱集行帳八珍詩駝蹄羹注、康居南鄙伊邏迤西、沙磧斥鹵、往々產野駝、麓沆、麓沆馬洞也、麓沆奄蔡語也、國朝因之」とあるによれば、奄蔡語にては馬洞を麓沆といひしなり。而して此馬洞に就いては西陲總統事略（卷十二）回俗紀聞の條に「牛馬乳釀酒爲阿拉占、酸乳爲氣格、即馬洞也」とあり、又三州輯略（卷之七）西輙牧唱詞六十首の條に「皮囊取醉賀豐年（準人縫皮爲袋、中盛牝乳、京其口、久而成酒、味微酢、謂之洞酒）」とあれば、馬洞とは牛馬の乳を以て釀造せる酒をいふ名なり。回語に之を阿拉占といふは、Teleut 語の arażan にて酒或燒酎をいふ。他の Turk 語、蒙古語、滿洲語に araki, araki, arki といふと同語なり。(Klaproth. A. P. XXXIX) 奄蔡の麓沆は牛馬の乳にて製造せる酒にて、元朝も之に因るといへば、蒙古人もこの名にて呼びしなり。而して元代の蒙古人が斯樣の酒を Kemiz といへることは、Marco Polo の紀行に之を記せり。(Yule. Marco Polo. 3rd Ed. Vol I. pp. 249—252) Yule の註に Kemiz は Kimiz, Kumiz ともいひ蒙古人が常に飲料に供したるものなりとあり。Scythia 人が此種の酒を有せしことを最も精細に書き記したる西方の史家は、Herodotos 及び Strabon なりとす。Hun 人も之を飲めるものと見え、Priscos には之を Καμος といへり。Rubruck の紀行に之を Cosmos といへるは、蓋し Comos の訛なり。(Rockhill. Journey of William Rubruck p. 62. Note, 1.) 今 Turk 語族の中 Saga 語 Koibal 語に馬乳にて製れる酒を Kumis といふ。(Radloff. Ver. p. 1050. a) Marco Polo の Kemiz, Priscos の Kamos, Rubruck の Cosmos は、何れも此の Kumis の轉訛なりと知るべし。雙溪醉隱集に載せたる奄蔡語の麓沆は疑もなく此の Kumis なれば、麓沆は沆麓の倒置にて、Kumis の對音ならん。支那人が外國の名稱及び言語

を擧ぐる時には、往々誤謬を犯すことあり。余輩は不思議にも Kumis の名が書き誤まられたる他の一例を知る。そは黑韃事略に「其軍糧羊與沸馬手捻其乳白沸馬之初乳日、則聽其駒之食、夜則聚之、以沸貯以革器、湧洞數宿、微酸始可飲、謂之馬孀子」とあり、而して徐霆の疏證に「霆嘗見其日中沸馬孀矣、亦嘗問之、初無拘於日與夜、沸之之法、先令駒子啜、敎乳路來、卽赶了駒子、人卽用手沸下皮桶中、却又傾入皮袋撞之、尋常人只數宿便飲、初到金帳韃主飲以馬孀、色清而味甜、與尋常色白而濁、味酸而羶者大不同、名曰黑馬孀、蓋清黑問之則云、此實撞之七八日、撞多則氣清清則不羶、只此一處得飲、他處更不曾見、玉食之奉如此」とある是なり。さて此文中に見えたる馬孀子及び其略稱たる馬孀は、Kumis を謂へること明白なれば、馬孀子が駒孀子の誤寫なること察するに難からず。

以上述べたる所によりて、康居の東西兩方面の境界は略ぼ推定し得たれば、此より南方の境界に就いて考究すべし。史記の大宛傳を案ずるに「大月氏在大宛西可二三千里、居嬀水北、其南則大夏、西則安息、北則康居」とあり。康居が南方に於いて大月氏と土壤を接したることは、此文面にて明かなれども、康居の所領たる Tuškend と嬀水卽 Amu 河との間には、Sogd (Sugdak) の地横はるが故に、此一國の所屬が定まらざる以上は、康居と大月氏との接觸點は曖昧たるを免かれず。史記の文に大月氏は大宛卽ち Fergana の西に在りと見ゆれば、Sogd の地は大月氏の領土のやうに思はるれど、其下文に「大夏在大宛西南二千餘里、嬀水南」とあれば、大宛より大月氏に至るも、また大夏に至るも、その里數に於いて大差なきを見るべし。且又大月氏の

條に「始月氏居敦煌祁連間、及爲匈奴所破、乃遠去過宛、西擊大夏而臣之、遂都嬀水北爲王庭」とある文を玩索しても、大月氏の牙帳は嬀水を距る遠からざる處にありて、Sogdiana の地にありしとは思はれず。但史記の文は簡略なれば、之によりて康居の南界を的確に考定すると能はざれど、漢書の西域傳に記す所は、稍〻精細に亙れるを以て、之によりて大月氏と康居とが接觸せし界線を彷彿し得るが如し。尤も史記の大宛傳は專ら武帝の時に得たる材料によりて書かれたるものなれば、傳中の事項は當時に於ける狀態に係れど、漢書の西域傳は武帝の時より前漢末までの年間を包含するが故に、その間に西域の形勢に多少變動ありしを語る。史記大宛傳に大夏の都とてし記せる藍氏城は、漢書西域傳に大月氏の都として擧げたる監氏城と全く同處にて、今の Balkh を謂へるものなれば、大月氏は張騫が西域を去てより後前漢の滅亡せしまでの間に、大夏を悉く征服して、遂にその都城に據れるなり。又漢書には康居の五小王の領土を擧げたれども、史記には之を記さず。而して此五小王の領域は康居の南境を考定するに必要なれば、左にその全文を引用す。

一曰蘇薤王治蘇薤城、去都護五千七百七十六里、去陽關八千二十五里、

二曰附墨王治附墨城、去都護五千七百六十七里、去陽關八千二十五里、

三曰嶺匿王治嶺匿城、去都護五千二百六十六里、去陽關七千五百二十五里、

四曰罽王治罽城、去都護六千二百九十六里、去陽關八千五十五里、

五曰奥鞬王治奥鞬城、去都護六千九百六里、去陽關八千三百五十五里、凡五王屬康居。

單に此文面のみにては五小王の領土を何地と定むべきやうなければ、唐書は如何なる古記にや據りけん、此王國を一々唐代に知られたる西域の國々に考定せり。即ちまづ蘇薤城に就いては「史或曰佉沙、曰揭霜那、居獨莫水南、康居小王蘇薤城故地」と云へり、佉沙は Arabia 人の所謂 Kiššs なり。又附墨城に就いては「何或曰屈霜你迦、曰貴霜匿、即康居小王附墨城故地」と云へり、この屈霜你迦は Arabia 人の Kušanija、Persia 人の Kušani、Iran 人の Kušnik なり。又窳匿城に就ては「石或曰柘支、曰柘折、曰赭支、治柘折城、故康居小王窳匿城故地」と云へり。この柘折は Arabia 人の所謂 Šaš なり。又罽城に就いては「安一曰布豁、又曰捕喝、西瀕烏滸水、治阿濫謚城、即康居小君長罽王故地」と云へり、この布豁は Bukhāra の對音なり。又奥鞬城に就いては「火尋或貨利習彌、曰過利、居烏滸水之陽、城居小王奥鞬城故地」と云へり、この貨利習彌は Chwârism の對音にして、奥鞬は Orgenč の音譯ならん。若しも此の考定の如しとすれば、康居五小王國の中蘇薤附墨罽三王の領土は Sogdiana、奥鞬王の領土は Khiva、窳匿王の領土は Taškend なれば、康居は前漢の末に南方に於いて Sogdiana 及 Chwârism を包含せしに相違なきが、たゞ問題は張騫が西域に至れる頃に、已に康居は此の如き廣大なる版圖を有せしや否やといふにあり。史記大宛傳中の康居と漢書西域傳中の康居とを比較對照するに、國勢の上に多少の變動ありしは確なり。何となれば史記には「康居控弦者八九萬人、與大宛隣國、國小、南羈事月氏、東羈事匈奴」とあるに、漢書には「勝兵十二萬、東羈事匈奴」とありて、康居が月氏に羈事するを云はざるのみならず、兵數に於いて三四萬人の增加を見ればなり。然れば張騫が西域を

去て後前漢末に至るまでの間に、康居が勢力を增進し來りしは事實なり。然れども此等の事情より臆測を逞うして、Sogdianaは元と大月氏の領土なりしが、康居が勢力を得るに從て、之を奪ひ取り、大月氏は遂に南方に押し出されしならんと云ふに至りては、果して當時の眞相を得たるものなりや。斯る假定說を始めて提出せしはTomaschek氏にして、之が熱心なる贊成者は實にFranke氏なりとす。然れどもFranke氏が康居の版圖に關する考察には誤謬多く、特に此國の實力を實際より過少に見たる嫌あり。今試に此國に就いて氏の云ふ所を記さんに「史記によれば康國(康居の誤)はFerganaの西北に位し、恐くはTaskendの平野に據れる小なる游牧民族にして、月氏と風俗を同じうし、南に於いては月氏に、また東に於いては匈奴に羈事せしとあるに、漢書の記す所を見るときは、此國の勢力の著しく發展せしを認むべし。即ち史記には人口八九萬とあるを漢書には人口六十萬、勝兵十二萬とあり云々」と。(Zur Kenntnis der Türkvölker und Skythen Zentralasiens. pp. 67—68.) 若しも同氏の云ふが如く、史記に康居の人口は八九萬とありて、漢書に六十萬とありとすれば、此國が張騫の時代より前漢末までの間に、非常なる急速の發展を致しゝに相違なからんが、余輩が此二書の文面を通讀したる所にては、決して斯る事實を認むること能はず。蓋し氏は康居の控弦者八九萬とあるを人口と誤解したるが故に、遂に此の如き結論を得たるなり。史記に控弦者八九萬とあるは、漢書に勝兵十二萬とあるに比較すべき言にして、之を同書に口六十萬とあるに對照せしむべきものにあらず。氏は既にこの見易き史記の文字を誤解したればこそ、康居の人口に八九萬

對六十萬の差異を見たれど、其實康居の兵力は史記の時より漢末に至るまでの間に、僅に三四萬人の增加を見たるに過ぎざるなり。されば康居の兵力は張騫の西域に至れる頃より、前漢滅亡の時に至るまでの間に、增進したるは事實なれども、その疆域に於いては差したる變化なかりしものと思はる。殊に Sogdiana の地が當初より康居の領域に屬せしことは、史記の文面を精讀しても、之を推測し得べきが、更に漢書卷十六の張騫傳に「大宛以爲然、遣騫爲發驛、道抵康居、康居傳致大月氏」とあるを見れば、益々余輩の推測の誤まらざるを悟るべし。既に前にも述べたるが如く、當時大宛の西境は今の Ura Tube に達したれば、若しも大月氏の領土が Sogdiana 即ち Zarafšan 河の流域を包轄したらんには爭でか康居人の手を借りて、張騫を大月氏に傳致する必要あらんや。思ふに Sogdiana の地は當時已に康居の勢力內にありしなり。故に大宛は張騫を康居まで送り屆け、康居は更に之を大月氏に傳致したるなり。且また地勢の上より之を考ふるに、Sogdiana と Tokhâra との間には鐵門の險ありて、自ら兩域を截斷す。而して Tokhâra に據れる勢力が Zarafšan 河の流域に及ぶことの困難なるは、Taškend, Turkestan 等の地を占領せる邦國が、此地域を命令するの容易なるに如かず。余輩は此等の理由によりて、康居は武帝の時より既に Sogdiana の地を領有せりと考定せんと欲す。

康居が紀元前二世紀に Sogdiana を領せるは事實なれども、此地は固より康居の屬國にして、その本國にあらざりしなり。然らば Sogdiana は如何なる名稱にて漢人に知られたるかといふに、史記漢書にその名を擧げざれば、之を知ること能はざれども、後漢書には正しくそ

の名を記せり。即ち同書（卷八十八）西域傳に「粟弋國屬康居、出名馬牛羊、葡萄衆果、其土水美故、葡萄酒特名焉」とある粟弋國是なり。粟弋の二字今は Su-i と音ずれど、字音は Zoku-yoku、安南音は Suk-dok なれば、その Sugdak 即ち Sogdiana の對音なること明かなり。Sugdak の名は Assyria, Persia の古碑及びギリシアの古書にも見えて、古來有名の地なれば、張騫が西域に至れる頃に、此名稱の存せざる理あるべからず。思ふに前漢時代の史書その名を逸したるなり。後漢の頃は大月氏の勢力が隆盛を極めたる時期なりしにも拘はらず、Sogdiana 即粟弋國が依然として康居に隸屬せしを以て之を觀ても、此國が康居の屬國となりしことの由來久しきを推知すべし。さて康居と粟弋とが別國なりしことは、後漢書の西域傳にても之を知るべきが、また晉書（卷九十七）康居國の條に「康居國在大宛西北可二千里、與粟弋伊列鄰接、其王居蘇薤城」とあるにても之を證すべし。康居の本國が Sogdiana の外にありたればこそ、晉書に此國は粟弋國及伊列國と鄰接すといひたるなれ。若しも康居の本國が Sogdiana の地なりとせば、晉書の文は遂に之を解するに由なからん。然れども茲に怪むべきは康居王が蘇薤城に治すとある文面なり。晉書の蘇薤城は漢書五小王城國の一なる蘇薤城にて、唐書によれば、此城は當時の佉沙國即ち Arabia 人の所謂 Kesś 城なりといふ。Kesś は Sogdiana に屬せしが故に、晉書の蘇薤城が果して此 Kesś ならんには、康居王は粟弋國に治せしことゝなる。粟弋國が晉時代に於いても、尙康居國に隸屬せりとすれば、この理に於いて不可能にあらざれども、晉書の文面より之を見るときは、頗る安んじがたき感なくんばあらず。思ふに唐書が蘇薤城を以

て當時の佉沙國と考定せしは、誤れるにはあらざるなきか。史記の大宛傳を案ずるに、「宛西小國驩潛大益宛東姑師扜罙蘇薤之屬皆隨漢使獻見天子」とあり。若しも此文の如くんば、蘇薤は大宛の東にありし一國にして、之を Sogdiana に求むべきにあらず。然れども蘇薤城は康居國の屬地なれば、之を大宛の東にありしと見ては實際に合はず。或は大宛の東北にありしものか。そは何れにせよ、晉書が康居王の治城として擧げたる蘇薤城は、Sogdiana 即ち粟弋國以外の地に求むるを至當とすべし。（晉書に見えたる伊列國は、漢書に記せる伊別國にて、伊犂河口邊に據れる民族なり。而して魏志に引用せる魏略に「西北則烏孫康居、本國無增損也、北烏伊別國、在康居北」とある處に見えたる烏伊別國は、伊列國の誤にて、實は「西北則烏孫康居」とあるに對して、「北則伊列國」と書かれたりしを誤寫せし者なるべし）

康居國と粟弋國とは古來此の如く截然と區別せられたるにも拘はらず。東洋學者は多く康居の本地を以て直に Sogdiana と爲すは大に怪むべきことなり。Klaproth 氏はその理由を述べて曰はく「漢史に小 Bokhara の曠野（即ち Kirgiz の曠野）に住居する民族をも康居と稱するは、此地の游牧民が康居王即 Sogdiana 王に隷屬せしが故か、然らざれば此民族は Sogdiana 人と同種なりしが故なるべし」と。（Magazin Asiatique p. 119）氏の後に出でたる東洋學者は多く此說を奉ぜしが故に、Vivien de Saint Martin が奄蔡は康居の西北二千里とあるを Sogdiana の西北二千里と解せしが如き、（Etudes de Géographie Ancienne）又 Tomaschek 氏が康居と題して Sogdiana の地理を考證せしが如き、（Zentralasiatische Studien）其外大抵然らざるなし。然るに Hirth 氏は前にも述べたるが如く康居國に就いて曰はく、康居は、一半は城郭を有し一半は游牧を業とせし民族より成れる國にして、前者は Samarkand を始とし Zar afsan 河流域と其附近とに據り、後者は此

國の北部即ちBalkhaš湖とAral海との間に據れり。而して郅支單于の住處として與へられたるは、後者の地域にありしなりと。氏の考は從來の說に比して稍一頭地を抽くといへども、未だ康居國と粟弋國との區別を認むるに及はず。又Richthofen氏は康居の住地をChimkend及Turkestanの間なりといひ、Franke氏は之をTaškendの平野なりといへば、此二氏は未だ康居國の實際の範圍に就いて、明瞭なる考察を有せず。余輩の考ふる所を約して之を云へば、康居はTurk種に屬する游牧民族にして、其勢力の根源地は今のKirgiz曠野にて、Syr河以北は實に此民族の本國なり、而して粟弋國即ちSogdianaはその屬國にして、其土民は疑もなくIran種なりとす。

以上余輩の論證せし所を讀まん者は、康居の本地がKirgiz Kasackの曠野にありしを認むると共に、泰西の東洋學者が之をSogdianaに擬するを怪むならん。然し彼の學者が此誤謬に陷りて自ら之を悟らざるには、またその原因なくんばあらず。漢史を案ずるに、漢晉時代までは康居と粟弋とは截然と區別せられたれど、南北朝時代より康居の方位は漠然となり、而して魏書、隋書、北史に康國即ちSamarkandは康居の後なりと書き出でてより、康居は專らSogdianaを指しゝ者なりと思惟せらるゝに至れり。今日の東洋學者が多くSogdianaを康居の本地と考定して疑ざるは蓋し此等の末書の云ふ所を信じて、漢晉時代の康居に就いて深く思を致さゞるに因る。而して魏書などにいふ所の康國は、同書に載せられたる粟特(即ち粟弋)國に包容せらるべきものにて、之を康居と混同すべきにあらず。其理由は別に粟特國考に

於いて詳述すべければ、茲には省きつ。

正史に見えたる康居國の事は、以上述べたる所にて殆ど之を盡せりと信ずるが故に、是より佛籍中に記されたる康居國に就いて聊か考究する所あるべし。高僧傳、大唐內典錄、開元釋敎錄等を案ずるに、西域より中國に來りて佛典の飜譯に從事せし高僧に、康巨、康孟詳、康僧鎧、康僧會、康道私の五名あり。此等の僧侶の名稱に康字を冠するは、其本國康居の頭字を取れるなり。そは恰も天竺より來れるが故に、竺法蘭、竺佛朔、竺大力といひ、月支より渡れるが故に、支婁迦讖、支曜、支謙といひ安息より至れるが故に、安世高、安玄といふの類なり。されば彼五僧の本國が康居なりしは疑なけれど、康居の名は時代によりて、其の指す處を異にするが故に、此處にいふ所の康居は、果して何地の國をいへるかを考察する必要あり。高僧傳（卷一）を案ずるに「康僧會其先康居人也、世居天竺、其父因商賈、移于交阯、會年十餘歲、二親並亡、以至性奉孝（中略）時孫權已制江左、而佛敎未行」とあれば、會の祖先が康居國に出でしによりて、支那にて康僧會と呼びしと明かなり。大唐內典錄（卷二）に「魏齊王世正始中天竺沙門康僧會、學通三藏、博覽六經、天文圖緯、多所綜涉、辨於樞機、善屬文翰」とあるは、康僧會が天竺に住居せしが故なり。而して隋書（卷十五）に「三國時有西域沙門康僧會、齎佛敎至吳、吳主孫權甚大敬信」とあるは、康居を西域の一國と見たればなるべし。又開元釋敎錄（卷一）に「沙門康臣（康巨）西域人、心存遊化、志在弘宣、以靈帝中平四年丁卯、於洛陽、譯問地獄經」とあり、大唐內典錄（卷一之）に「中天竺國沙門康孟詳、獻帝時、於雒陽譯梵網經等」とあり、高僧傳（卷一）に「有外國沙門康僧鎧者、以嘉平之末、來至雒陽、譯出郁伽長

者所問經等四部經」とあり、之を大唐內典錄一卷には「中天竺國沙門康僧鎧」といひ。又高僧傳一卷に「又有沙門支曜康巨康孟詳等、並以漢靈献之間、有慧學之譽、馳於京雒」とあり。さて此等の僧侶に就いて、或は天竺の人といひ、或は外國といひ、或はその國名を擧げざれども、何れも康字を冠する所より之を察するに、其人或はその祖先が康居國に出でたることは、また疑を容るべからず。而して康巨が支那にありしは西曆一八七年、康孟詳は一九四年より一九九年、康僧鎧は二五二年、康僧會は二四一年、康道和は三九二年なれば、其年代は後漢末より東晉に亙れり。(Nanjio, Catalogue of the Tripitaka. pp. 384, 386, 390, 399.) 而して此時代に康居國が存立せしことは上段考證せし所にて之を知るべければ、彼五僧が此國より出でたりと爲すに於いて、何等怪むべきものなきに似たり。然れども退いて之を考ふるに、此時代の康居は今の Kirgiz Kasack の地にて、その土民は Turk 種に屬し、重に游牧を業とする勇悍の民族なり。此の如き民族の間より商人、僧侶を出さんとは如何にや。然るにその屬國たる粟弋國は古來文化の本源地にして、其民は多く平和の業務に從事する Iran 人なれば、彼の五僧の祖先は此地の人にはあらざるなきか。而して此等の僧侶の事蹟を傳へたる最古の記錄は高僧傳なれど、此書は梁代(自西曆五〇二至五五七年)の僧慧皎の編纂に係れば、此時代にいふ所の康居は何地なりしかを考究する必要あり。魏書一百二卷隋書八十五卷北史九十七卷の西域傳に「康國者康居之後也」とあれば、南北朝時代より隋代にかけて、支那人は康國を以て康居國なりと思惟せしなり。然れども康國は今の Samarkand なれば、寧ろ之を粟弋國(粟特國)に當つべきも、漢晉時代の康居に擬すべ

きものにあらざるなり。因て案ずるに、彼五僧が康某と呼ばれしは、南北朝時代にいふ所の康國即ちSamarkandに關係し、漢晉時代の康居國に緣故なかりしやも知るべからず。尤も南北朝時代に於いても康居の名は史上に絕えたるにあらず。例へば魏書の西域傳に安息國北は康居と接すとあり。又粟特國は康居の西北に在りとあるの類即ち是なり。然れども此の康居國が何れも漢代の記錄を剽竊したるものなることは、粟特國考に於いて詳論すべければ、之を以て漢晉時代の康居國が、當時に存在せりといふ證左と爲しがたし。

獨り康居國が漢代と南北朝時代とに於いて、その指す處を異にせしのみならず、安息國に於いても亦同然たりしなり。周書（卷十五）の異域傳に「安息國在葱嶺西、治蔚搜城、北與康居、西與波斯相接、去長安一萬七百五十里、天和二年其王遣使來獻」とある文によれば、當時漢代の安息國は依然として存立せし如くに思はるべきが、此國は西曆二二六年即ち魏の文帝黃初七年に薩珊朝のArdešir王に滅ぼされたれば、周代に此國のあるべきやうなし。然れば當時の安息國は必ず漢代の安息國にあらざるべしと思はれたるに、隋書（卷八十三）の西域傳を案ずるに「安國漢時安息國也、王姓昭武、與康國王同族、字設力登、妻康國王女也、都在那密水南」とあり、又唐書（卷二百二十一下）の西域傳に「安者一曰布豁、又曰捕喝、元魏謂忸密者、東北至東安、西南至畢皆百里、西瀕烏滸河、治阿濫城、即康居小君長罽王故地、中界是歲（貞觀初）東安國亦入獻、言子姓相承十世云、東安或小國、曰渴汗、在那密水之陽、東距河二百里、西南至大安四百里、治渴汗城、亦曰䋣斤、大城二十、小堡百、顯慶時以河濫爲安息州、即以其王昭武殺爲刺史、䋣斤爲木鹿州、以其王昭武閉息爲刺史」と見え

たり。唐書の布豁、捕喝はBokhāraにて隋唐二書の那密水はZarafšan河なれば、隋時代の安息國は漢代の安息國と、全くその方位を異にせり。果して然りとせば、南北時代の安息國も今のBokhāraを指せしにはあらざるなきか。飜て佛籍を顧るに、安息國より中國に渡りて、佛典の飜譯に從事せし名僧に安世高、安去、安法賢、安法欽の四名あり。而して安世高の中國にありしは西曆一四八年より一八〇年まで、安去は一八一年、安法賢は魏の時、安法欽は二八一年より三〇六年までとす。安息の滅亡は二二六年なれば、安世高、安玄の二人は確に安息國の存亡せし時の人なれども、安法欽はこの國滅亡してより後の人なり。安息國已に滅亡するも、漢人の尙舊稱によりて或る時期の間此名を持續するは、實際あり得べきことなれば、彼四僧の本國は漢代の安息にして、隋唐時代の安息國ならざりしやも知るべからず。然れども佛籍列傳の上代に係るものには、往々信を措きがたきものあり。且つ此四僧の事蹟を傳へたる高僧傳は梁代に成り、內典錄、開元釋敎錄等は何れも唐代の編纂なれば、彼四僧の本國は漢代の安息にあらずして、南北朝及隋唐時代の安息なりしやも測られず。暫く疑問を述べて、後日の考究を待たん。（未完）